2003年度第6回物学研究会レポート

「脳化社会における、人、身体、モノの関係」

養老孟司 氏
（北里大学教授、東京大学名誉教授）

2003年9月9日

BUTSUGAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

第6回　物学研究会レポート

2003年9月9日

2003年9月の物学研究会は解剖学者の養老孟司氏を講師にお招きしました。養老氏の研究、興味の対象は現代の科学や技術、社会や人間の生活まで幅広く、最近では『バカの壁』がベストセラーの記録を更新中です。

今回の物学研究会では「脳化社会における、人、身体、モノの関係」をテーマにお話をいただきました。以下はそのサマリーです。

「脳化社会における、人、身体、モノの関係」

養老孟司 氏

（北里大学教授、東京大学名誉教授）

① 養老孟司 氏

確実なもの

この研究会は「物学」ということですが、「物」についてときどき思うことがありますので、その辺から私の話を始めたいと思います。

私は戦争体験者です。小学校2年生のときに終戦を迎えました。戦争中は国民全員が「一億玉砕」、「お国のために死ぬ」ということを当り前のこととして考えていました。なのに戦争が終わると手の平を返したように、今度は「平和だ」、「民主主義だ」、「マッカーサー万歳！」となった。この時代に生きた人の多くは「この世には確実なものなんて何一つないんだ」ということを無意識に感じたのではないでしょうか。私が医学生となって「解剖学」を専攻した理由もここあるように思います。つまり、医学の中で一番「確実」なものは何なのか。医学においては死んだ人間を扱う解剖学よりも確実なものはないのではないか、と。

私が学生の頃、「日本がアメリカに負けたのは物量の差だった」と言われていました。そんなときに私は「人々の価値観や気持ちは社会状況の変動で大きく変わる。しかし、優れた技術や物はどんな時代にも生き続けるのだ」と気付いたのです。戦後の日本は海軍や陸軍の技術将校が中心となってさまざまな企業を起し、戦後復興の原動力となりました。ソニー、松下、ホンダなど世界に冠たる日本

の物作りの基本は、人々が物こそ不変であると考えた結果なのです。最近、ＮＨＫの「プロジェクトＸ」という番組が話題を呼んでいます。あれを見ていると、戦後の日本人があれだけ一生懸命に物作りに励んだ理由は、単なるハングリー精神からではない。むしろ「確実なもの」を求めたからだということを再確認できます。

ですからこれだけ長く平和が続いる今、皆さんが「物」に対してどのくらい本気で考えているのだろうかと、私はちょっと疑っているわけです。一方で日本は物作り大国といわれていますが、今までお話ししたような単なる敗戦の反動であるのならば「嘘っぽさ」を感じます。むしろ平和が続いているこれからの物作りこそが、本当の日本の実力なのでしょう。

戦後日本の「物」主義

さて、日本が物作りに邁進したもう1つの大きなきっかけは、戦後の「エリート教育」の喪失でないでしょうか。こう申し上げると、「養老さんは東大医学部というエリート教育の現場にいらしたではないですか」と逆に指摘されてしまいます。けれども、「そんなものは本当のエリート教育ではありません」と言い返しています。

では本当のエリートは何なのか？　私のインターン時代の経験からお話ししましょう。私は解剖学を専攻しましたが、1年間は病院でインターンとして働きました。当時の病院は今ほど設備も整っていませんし、患者がたびたび亡くなりました。逆に言えば、臨床の現場で働いている限り、どんなに慎重に治療にあたっても医者の予測を超えた事態が起こり得るということです。ましてや医療技術は日々進歩していますから、新しいことを取り入れるときには大きなリスクが伴なうのは当り前です。確実に治るとか、助かるなんてことはありません。ですからどんなに慎重に臨んでも自分が施した治療で患者さんを死に至らしめることもあります。つまり患者さんを殺してしまうということです。

医者に限りませんが、こうしたリスクを自ら負い、その重みに耐えることのできる人のことをエリートというのだと思います。政治の世界も同じです。小泉首相が何か改革を行えば、一方で損をする人が必ずいる。しかし政治家はそれでも国の将来を思って政策を実行しなければならないのです。ところが最近の日本の政治家は本気でリスクを負って行動しているようには見えません。真のエリートを教育しなくなった日本は精神性を失いました。そして「物」中心の国になったのです。「物」こそが戦後日本の確実なものの象徴だったわけです。

「物作り」や「科学技術」は確実なものであると同時に「ニュートラル」だと考えられています。私はこうした考え方にも疑いをもっています。例えば、現在の科学常識である「タバコを吸うと肺がんになる」という定説です。これを最初に言い出したのはだれなのか、皆さんはご存知ですか？　それはナチの医学者です。禁煙運動はナチの支配下のドイツで起こりました。思い浮かべてください。当時の代表的な政治家であるチャーチルやルーズベルト、スターリンらは皆タバコを吸っています。しかし、ヒトラーやムッソリーニ、フランコはタバコを吸いませんでした。皆さんが信じている禁煙や自然食志向は実はナチから始まったのです。私はこういう正義をかざした運動に対して、ある種の原理主義の匂いを感じてしまうのです。

情報は不変

今まで「物」を語ることによって「確実なものとは何なのか」を探ってきました。私にはもう1つ「変わらないもの」があります。それは「情報」です。「変わらないもの＝情報」という結論に達するために長い時間が必要でした。

「情報が変わらない」というのは詭弁であると思う人が多いでしょう。けれども情報は変わらないのです。今からおよそ2000年前、ギリシアのヘラクレイトスは「パンタレイ（万物流転）」と言いました。人も物もおよそこの地球上に存在する万物はどんどん流転して残らない……と。ヘラクレイトス自身もとっくに死んでこの世にはいません。しかし、ヘラクレイトスの死後2000年たっても「パンタレイ」はずっと残っています。「パンタレイ」は情報になったから残っているのです。そうすると「でもＮＨＫのニュースは、朝昼晩と内容が変わっているではないか」という人が必ずいます。けれども考えてみてください。現在のニュースは一度放映されると多分デジタルメディアにそのまま保管されるでしょう。保管されたニュースはいつでもそのままの状態で再生することができます。新聞だって、雑誌だって同じことです。一度印刷された情報は2度と変わらないのです。

けれど皆さんは私の話を聞きながら「納得できない」という表情をされています。それは現代人の大半が「私は私」、かつて哲学者のデカルトが言った「我思う故に我あり」と思っているからです。「私は私、私は同じ、私は変わらない」という考えが社会に定着したのは19世紀後半のヨーロッパでした。いわゆる近代合理主義です。これは「自己同一性」を日々追い求めているということでもあります。ところがです、物質である人間の身体を構成している細胞は刻々と入れ替わっていて、1年もすれば総交換されていると言っても過言ではありません。顔の皮膚なんて1週間できれいに入れ替わってしまいます。このような現実を前にして、いったいどこが「同じ私」なのでしょうか？　身体、物質的には「私は私、変わらない私」なんていうことは言えないのです。しかし常に客観性を求められ、物質に依存している現代人は「私は私、私は同じ。私は変わらない」と考えているに違いありません。

私はこうした「私は私」の現代社会を意識的社会、脳化社会と呼んでいます。ところが私にとっては「情報」こそが変わらないものなので、皆さんが「私は変わらない」と考えておられるのであれば、私にとって皆さんは「情報」ということになります。「人間＝情報」になったから、現代人は死ねなくなったのかもしれません。「変わらないもの＝情報」が死ぬはずがないからです。現代人は心のどこかで自分は死なないと思っている。死なないと意識している。

意識と言葉

意識と言葉は深く関わっています。意識と言葉はパラレルに働いています。例えば「リンゴ」という言葉で考えてみましょう。私が「リンゴを描いてください」とお願いすると、上手いか下手かは別として、皆さんはちゃんとしたリンゴを描いてくれるでしょう。このとき、皆さんの脳内には「リンゴ活動」が起こっています。ところが日本語を知らないアメリカ人に「リンゴを描いて」と頼んでも、彼は「リンゴ」という言葉を知らないので描くことができません。彼の脳内ではリンゴ活動が起こらないからです。「リンゴ」という言葉は、外にあるリンゴと脳内のリンゴ活動という２つの意味

があるということです。外（実体として）のリンゴは一個一個に大きさや色が違っていて２つと同じリンゴはありません。しかし脳内のリンゴは意識上のリンゴであり、私たちが考えるリンゴの概念をすべて包括しているリンゴです。プラトンはこれを「イデア」と言いました。

西洋では当り前のように、外のリンゴと脳内のリンゴを使い分けています。それは私たちが英語の授業でさんざん悩まされた不定冠詞「a」と定冠詞「the」です。英語では脳内のリンゴには不定冠詞を使い、外のリンゴには定冠詞を使います。西洋哲学の基点はまさに不定冠詞と定冠詞の使い分けが基点です。フランスの言語学者ソシュールも同じようなことを言っています。それは言葉が意味しているものを「シニフィアン」、言葉によって意味されるものを「シニフィエ」として表現しました。難解な解説ではありますが、シニフィアンは脳内のリンゴで、シニフィエは外のリンゴということになるでしょう。

では日本語にはこの発想がなかったのかといえばそうとも言えません。日本人は「が」と「は」という助詞を駆使して表現していました。例えば「むかしむかし、おじいさんとおばあさんが居りました。おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に行きました」というだれもが知っている昔話の導入部分です。「……おじいさんとおばあさんが居りました」と聞いて、私たちの脳内にはおじいさん・おばあさん活動が起きて、特定のイメージを思い浮かべます。そして思い浮んだ後に特定された「おじいさんは芝刈りに、おばあさんは洗濯に行く」わけです。これは日本語の不定冠詞と定冠詞の使い分けの現れです。私は以前、中国人に日本語を教えたことがあります。中国語は漢字が並んでいるだけなので、中国人にとって助詞の使い分けはとても難しい。中国人が日本語を話すと「むかしむかし、おじいさん、おばあさん、いました。おじいさん芝刈り、おばあさん洗濯に行きました……」と、不完全な日本語になってしまうわけです。

意識の個性

いろいろな例を上げながら意識について、そして意識が支配する脳化社会についてお話してきました。これからは「意識に個性があるのか」をお話しします。私は医学を学びました。ですからは意識に個性のある人たちを知っています。例えば、自分のウンコで壁に絵を書く人、所構わず奇声を上げる人などです。彼らは明かに意識や心の個性を持った人であると思います。

心の個性とは一体何なのでしょうか？　人間の意識的行為とは、他人との共通性を追うこと、お互いを理解すること以外に意味はありません。仮に「心の個性とは他人に理解できない自分だけの心の動き」と考えるならば、そんなものは他人とは全く関わりのないことですから、個性があろうがなかろうが問題ではありません。

では、人間には個性がないのだろうか。「ある」に決まっています。皆さんの顔や体つきは違っています。つまり人間の個性とは身体なのだということです。例えば、大火傷を負って他人の皮膚を移植されたとしても絶対に受けつけません。たとえ親の皮膚をもらったとしても1週間もしないうちにその皮膚は真っ黒に変色して死んでしまいます。このように［身体＝個性］です。

私たちのような戦前世代の教育は、師匠を真似る、教師に習うことを第一としていました。この教育は、まず初めは一生懸命練習したり勉強をして何かを収得し、その後ようやく次の段階に行けるというものでした。ところが現代は違います。最近の若い人は何も収得できていない内から、自分探し

とか自分の個性とか、およそ無駄なことを考えさせられています。戦後、日本人が「私は私、私は同じ、私は変わらない」と考えるようになった瞬間から、こうしたトラブルが起こり始めたのです。その典型が、先ほどお話したように自分が情報になり、自分が死ぬことが分からなくなってしまったということです。

最近、私はある恩師を見舞いに行きました。そのときに先生は一言「教養とは人の心が理解できる心をいう」とおっしゃいました。最近の教育は「個性を伸ばせ」が何よりも重要視されていますが、個性は人間として生れ落ちたときから自然に備わっているものです。だからこそ自然に備わっている個性を潰さないように、一方で他人の心が理解できるような心を育むように、上手に按配してやるのが教師の役目です。こうした教育を喪失してしまった最大の理由は、人の意識なんてほとんど同じなのに、「個性」という言葉を使ってそれを変えなければならないと思いこむようになったことです。私に言わせれば、もともと備わっている「個性」を無理やり変えようとしたとき以来、おかしなことになってしまったのです。

人間＝情報？

先日、面白い体験をしましたのでお話します。それは妻と2人で東大病院の人間ドックに行ったときの体験です。先ず、担当医に会いに行くと「ああ、先生」と言って、1枚の紙をくれました。それは病院のマップで、指示通りに検査を受けろということなんです。先ずトイレでおしっこをとって、採血して、レントンゲンを撮られて、午前10時に始まった検査は午後1時過ぎにようやく終了しました。終わった瞬間、二人揃って「ああ、疲れた。体が丈夫じゃないと検診が受けられないよね」ということで思わず嘆息してしまいました。そして言われたのが「検査結果は1週間後に出ますので、また来て下さい」。冗談ではありません。私が検査の次の日に交通事故で死んだとしたら、検査は無駄に終わってしまいます。さて2週間後に検査結果を聞きに病院に出かけました。すると担当医は私の顔をほとんど見ることなく、検査結果が記された1枚の紙を見ながら話しをします。その紙には数字や記号がいっぱい書かれています。私はその光景を眺めながら「ああそうか、あの紙に書かれている数字が私の体なんだ」と思いました。これはまさに「人間＝情報」です。

人間ドックを受ける一方で私はそのデータを全く信用していません。なぜならそれらは2週間も前のデータだからです。多くの人がデータは確実であり正しいと信じていますが、データは過去のことで今さら変えようがないということだけなのです。しかしながら私たちは過去ではなく現代進行形で生きています。私は人間の「生」がどんどん分からなくなるのが情報社会であると考えています。情報社会は今お話したように、常に過去に足を置いているからです。そう考えると私たちがここ150年余りの目指してきたことは、現代進行形の人間を情報化してしまったということです。だから今の社会では情報化の専門家が偉いということになる。大学で言えば、論文をいっぱい書いた人が偉いということです。

ところがデザイナーである皆さんが行っている物作りは情報化の逆ですよね。医学や生物学を含めて多くの学問は複雑なものを単純な情報に置き換える方向ですが、物作りは単純な部品や回路を組み合わせながら複雑なシステムを構築していく。学問の世界では複雑なものを単純化し、さらに論文という情報に置き返ることが上手い人が偉い人です。

医学の領域ではこの単純化の方向は重大な問題をもたらした。それは死にかけた患者さんをどう扱うかという末期医療です。だれも教えてくれない領域であるため、医者たちも自分で探りながら取り組んでいます。

ある晩、ぼんやりテレビを見ていたら末期医療に取り組んでいる女医さんのインタビュー番組をしていました。その女医さんは途中で「ホスピスで上手に死ぬ人ってどんな人だと思いますか」と逆に質問をしました。インタビューアーが困っていると、「その日、その日を一生懸命楽しんで生きている人です」と言っていました。「過去でも未来でもない『現在』をフルに楽しんでいる人が上手に死ねる人です」と彼女は言っているのです。その番組を見てしばらくしてから、私は会社の偉い方々の前で今の話をしました。すると講演後にある企業の社長さんが寄っていらして「私の記憶を全部コンピュータに入れて記憶することはできないでしょうか」と質問してきました。私は「来たな！」と思いました。これは意識で生きている人にありがちな考え方で、自分の記憶をコンピュータに入れれば永久に生きることができると考えている。こういう人は多分、「実体」と「情報」の違いを考えたことがないのでしょう。

つまるところ、現代社会の問題は「私は私、同じ私、変わらない私」から始まっているように思えてなりません。その結果、現代進行形で生きているはずの人間は情報や物などに価値を見出し、これら停止したものを使って互いの共通了解を得ようと行動しているのではないでしょうか。だから私は「コミュニケーション」という言葉を使いません。この言葉こそ、まさしく「私とあなたという確実で変わらない存在がある」という現代人の錯覚の上に成り立っているからです。この錯覚の隙間を極めて軽い情報が飛び交うことが「コミュニケーション」です。私にとって情報とは不動のもの、つまり石ころのようなものです。この石ころの回りをふわふわした柔らかい人間が漂っていて、固い石ころにぶつかって傷ついたり姿を変えたりするというのが、私の人間と情報のイメージです。ここに「コミュニケーション」は成立しずらいのです。

以上

講師略歴

養老孟司（ようろう・たけし）氏
1937年神奈川県鎌倉市生まれ。医学博士。62年東京大学医学部卒業。
インターンを経て解剖学教室に入り、解剖学を専攻、81～95年東京大学医学部教授。
現在、北里大学教授、東京大学名誉教授。
主な著書：『考えるヒト』（筑摩書房）、『唯脳論』（青土社）、
『涼しい脳味噌』（文藝春秋）、『人間科学』（筑摩書房）、
現在『バカの壁』（新潮社）がベストセラー更新中。

2003年度第6回物学研究会レポート
「脳化社会における、人、身体、モノの関係」

養老孟司氏
（北里大学教授、東京大学名誉教授）

写真・図版提供

①；物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局
文責=関 康子

●［物学研究会レポート］に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
●［物学研究会レポート］に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1999～2003 Society of Research & Design. All rights reserved.